

古代ギリシア語における畳音式名詞の現れと その印欧語的解析

吉田育馬

1 本稿の目的

印欧祖語には通常の名詞とは異なった、語根部を重複させることによってできた一連の名詞群があった。これを畳音式名詞という。この畳音式名詞が古代ギリシア語ではいかなる形で現われ、そしてそれらは印欧語形態論的にいかに解析されるのかを検証してみたい。

2 古代ギリシア語における畳音式名詞の実例

畳音式名詞は印欧祖語においてはすでに化石的な形態であつたらしく、ラテン語やバルト語派やケルト語派やゲルマン語派ではごく僅かに散見される程度である。古代ギリシア語においても数は少ないものの、これらの諸語派とくらべれば圧倒的に多く、少なくとも形態論的に分類して分析できるくらいの数はあった。これらを畳音部の完全性や母音によって分類してみる。以下がその実例である。

α. 完全畳音型

①加音 i を伴うもの

$C_1éC_2-i-C_1C_2-o-s, -H_2$

μέδιμνος m. 「穀量の単位 (約 52 ㍩)」 < IE**méd-i-md-o-s*

μέριμνα f. 「心配、心痛、悩み」 < IE**mér-i-mr-H_2*

②加音なし

μέρμερος (ep.) 「恐ろしい、酷い、禍いをもたらす、気むずかしい、厄介な」

< IE*mér-mer-o-s

μέρμηρα f.(poet.) 「心配、心痛、悩み」 < IE*mér-mēr- H_2 (?)

δένδρεον (N437)(Ion.), δένδριον (Alc. 44)(Aeol.)n. 「木、樹木、果樹」 < IE*dér-drew-o-m ← IE*dór-u, 属*dr-éu-s > Ved. dāru, 属 drós, Av. dāuru, 属 dravš, OHitt. tāru /dāru/, Gk. δόρυ 「木材、槍」(いずれも中性)

βόρβορος m. 「泥(溇)、汚れ、汚物」

πορπυρίς (Ibyc. 4, Ar. Av. 304) f. 「紫色の鳥」

κάρκαρα (Semon. 33) n. pl. 「穀物の殻、ふすま」

μάρμαρος m. f. 「大理石」

καρκίνος (carm. conv. 16)m., pl. n. καρκίνα (AP6.295.5(Phan.)) 「蟹の類。〈天文〉蟹座。(悪性)腫瘍、癌」 < IE*kar-kr-o-s(?) = Lat. cancer, -crī m./n. 「蟹」: Skt. karkatas (< *kar-kar-to-s)

βάρβαρος 「異国語を話す」 < IE*bár-bar-o-s = Lat. barbarus

ὄλολυγή f. 「大きな叫び声」 < IE*ul-ul- : Lat. ulula f. 「梟」

β. 部分畳音型

①加音 e を伴うもの

$C_1e-C_1oC_2-é\text{H}_2$, $C_1e-C_1C_2-mó-s$

ἀκωκή (N251)f. 「尖端、切っ先」 < IE* $\text{H}_2\bar{k}e\text{-H}_2o\bar{k}-é\text{H}_2$

ἐδωδή (ξ193)f. 「食物、飼料、(魚を取るための)餌、食べること」 < IE* $\text{H}_1de\text{-H}_1od-é\text{H}_2$

ὄδωδή f. 「臭い、香り」 < IE* $\text{H}_3de\text{-H}_3od-é\text{H}_2$

ἐτήτυμος (X438)(poet.) 「真の、本当の、真実の」 < IE* $\text{H}_1te\text{-H}_1tu\text{-mo-s}$

τεθμός (Dor.)m. 「定まったこと(もの)。(神・人により)定められたこと、定め、掟、法、法律」 < IE*d^he-d^h $\text{H}_1\text{-mó-s} \rightleftharpoons$ Welsh deddf(-au) f. 「法」

②加音 i を伴うもの

$C_1i-C_1C_2-ó-s, -é\text{H}_2$

$C_1i-C_1eC_2-o-s$

$C_1i-C_1C_2-mo-s$

$C_1i-C_1éC_2-n-e\text{H}_2$

ἰστός m. 「柱、マスト。竪型の機」 < IE*si-st $\text{H}_2-ó-s$

ἰαχή (M144)f. 「叫び、歓呼の声；悲嘆の叫び；(一般に)叫び」 < IE*wi-w $\text{H}_2g^h-é\text{H}_2$

ἤμερος m. 「憧れ、願望、欲求、要求」 < IE*si-smer-o-s

δίδυμος 「二重の、両方の、二倍の、双子の」 < IE*di-du-mo-s

τιθήνη f. 「乳母」 < IE*d^hi-d^héH₁-n-eH₂

③その他

βάβαξ 「饒舌な人」 βάζω 「喋る、言う」

Παφλαγών, 複主Παφλαγόνες (N656), 与Παφλαγόνεσσι (N661) m. 「Παφλαγονία (小亜細亜の北部の地域) の人」: παφλάζω 「湧き立つ、泡立つ、荒れ狂う」 (Risch 1974: 341)

λαίλαψ, 与λαίλαπι (M375, μ314)f. 「暴風、突風」

ἀμαιμάκετος (poet.) 「抵抗し難い、打ち勝ち難い、頑丈な」: μακρός, 最μήχιστος 「長い」 < IE*mH₂ k-ró-s 最*méH₂ k-is-to-s, μήχος εος, n. 「長さ、高さ、広さ、幅」 < IE*méH₂ k-os, *-es-os

παιπαλόεις (ep.) 「峨々たる、高く聳えた」

以上が古代ギリシア語における疊音式名詞の実例であるが、全部で現在のところ 27 語である。完了形において疊音が規則化され、現在形やアオリストにおいても疊音がしばしば見られたギリシア語にとっては些か少な過ぎる感もないではないが、印欧語は古代より現代に至るまで、擬音語や擬態語に代表される疊音を伴った感覚的な単語が日本語と比べれば遥かに少ないことを考えると、これでも多いほうだと言える。次章では印欧祖語における疊音の問題を論じよう。ここで、古代ギリシア語における疊音式の名詞の解析を試みたい。

3 印欧祖語における疊音の問題と古代ギリシア語における疊音式名詞の解析

まず、印欧祖語において疊音なる現象は基本的には動詞において行われた。これも名詞同様、完全疊音型と部分疊音型があったが、名詞の場合と異なるのは、基本は部分疊音型であったということである。しかも疊音部の母音は i または e で名詞と相通ずるものがあった。これは時制によって次のように分類できた。

①加音 i を伴うもの

現在

mi-動詞単 C₁i-C₁éC₂-D(φ) Gk. δίδωμι (sg. 1) 「与える」

複 C₁i-C₁C₂-D(é/ó) δίδομεν (pl. 1), διδούς [分詞]

幹母音型 C₁i-C₁C₂-é/ó-D Gk. γίγνομαι 「生れる」

②加音 e を伴うもの

アオリスト C₁e-C₁C₂-é/ó-D Gk. παρ-πεπιθών (ξ290) 「口説いた、宥めた」

完了単 C₁e-C₁óC₂-D(φ) Gk. πέποιθα (N96)(sg. 1) 「信を置く」

複 C₁e-C₁C₂-D(é/ó) ἐπέπιθμεν (B341)(pl.1)

未来 C₁e-C₁éC₂-s-e/o-D Gk. τετεύξεταί (M345, M358, Φ322, Φ585)(sg.3)
「起こるだろう」

動詞の場合、この区分は明々白々である。すなわち、i は現在形であり、e は過去性の高いものであった。e については完了とアオリストはまず問題ないものの、未来が若干気にかかるが、これも未来形が元来 s-アオリストの接続法であった¹ ことを考えるとなんら問題はない。

名詞の場合には残念ながら、このような形態機能的な区分はできないが、これが動詞の疊音を模したものであることは明らかである。つまり上述のβ②型はまさに現在形の i による疊音そのものであるし、古代ギリシア語の諸形式は幹母音*-o-や*-eH₂-による拡張を受けてはいるものの、mi-動詞の単複の交代 e-φ と軌を一にしている。これは加音 e を伴うβ①型についてもあてはまるのであって、o 階梯のものと φ 階梯のものが在証されることは完了の単複の交代 o-φ を模した以外には考えられない。しかも紀元前 16 世紀に遡る文献資料を持つ小亜細亜のヒッタイト語には幹母音その他による拡張を受けていない mēmal n. 「オートミール」 < IE*mé-molH₂ なる一種の語根名詞があり、語幹構造的に完了形

¹初期の古代ギリシア語では幹母音-e/o-(< IE*-e/o-) を持たない非幹母音型動詞活用では (s-アオリストもこの中に含まれる)、幹母音-e/o-を添加することによって接続法を形成したが、これが印欧祖語伝来の接続法であった。ホメーロスには次のような例が見られる。

[能動]

mi-動詞現在 複 1 ἐρε(ο)μεν (A62) 「言う」 ἴομεν(B440, Z526, M216, E340, ζ31, ξ45) 「行く」

s-アオリスト 複 1 ῥέξομεν (H353) 「する」

語根アオリスト 複 1 χεύομεν (H336) 「築く」

完了複 1 (F)εἶδομεν (A363, N327, X130, X244) 「知っている」 2 (F)εἶδετε (Θ18)

[中動]

mi-動詞現在 単 1 βείομαι (X431) 「生きる」

s-アオリスト 単 1 φθέγγομαι (Φ341) 「叫ぶ」 2 ἱλασσαι (A147) 「(神を) 宥める」 3 δοάσσειται (Ψ339) 「見える、思われる」 複 1 ἱλασόμεσθα (A444)

語根アオリスト 単 1 κατα-θείομαι (X111) 「下に置く」 3 φθίεται (Y173) 「死ぬ、討たれる」 複 1 φθιόμεσθα(E87)

[受動]

η-アオリスト 単 1 δαείω (Φ61) 「学ぶ、学び知る」 複 1 τραπέομεν (Γ441) 「楽しむ、喜ぶ」 2 δαμήετε (H72) 「斃れる」

つまり、s-アオリストに限らず、非幹母音型活用全般に亘っていたわけだが、接続法には仮定の意味と同時に自発的な意志という意味機能があった。従って未来が瞬間相としての s-アオリストの接続法から生まれたというのはごく自然なことだったのである。古代ギリシア語の未来には接続法がなかったという事実がこのことを如実に物語っている。

とは完全に符合するのである。更に、ここで面白いことには、アクセント位置を示すとされるヒツタイト語の長母音表記 (scriptio plena) は完了形とは異なり、第一音節の疊音部にあるということである。*e と *o が同居した場合、アクセント位置は本来 *e にあったらしいということに鑑みるに (Gk. πέπων 「熟した、柔かな、優しい」、ἐλωρ (v208)n.(ep.) 「獲物、餌食」、τέχμωρ (A526, H30, N20)n.(ep.) 「確かなしるし、目的 (地)、帰着点」、ποιμήν m. 「牧人、(特に) 羊飼ひ」等を参照のこと。Beekes1985: 156-8 にもちよつとした説明がある。) むしろこちらの方が本来のアクセント位置を表わしているものだと思われる。

すなわち完了形では印欧祖語の時代に $C_1é-C_1oC_2-D(e) > C_1e-C_1óC_2-D(e)$ なるシフトが起こったのであり、疊音式名詞の方が本来のアクセント位置を表していると見られるのである。ただ古代ギリシア語では *-eH₂- なる一種の抽象名詞や集合名詞を作る接尾辞 (これはのちに女性となった。大阪外国語大学学術研究双書 8 『古代ブルガリア語文法』 157, 172-7, 179-80 頁等を参照。) が追加され、そこにアクセントを持ったため (語根が o 階梯の時は女性接尾辞にアクセントを持った。γονή 「生むこと、血統、種族」、τροφή 「食物、糧秣、養育」、κλοπή 「盗み」、ρόπή 「天秤の皿が下ること」、στροφή 「回ること」 ῥοή 「流れ、川」や Lith. sravà 「流血」、šakà 「枝」、dagà 「暑熱」等を参照のこと。) 、本来のアクセント位置はわからなくなっている。

以上の考察よりわかることは、名詞の場合も部分疊音型の名詞に関しては動詞の場合と同様の疊音を行なうこと、つまり加音 i によるものと加音 e によるものの二通りがあったということと、加音 e によるものはどうやらアクセントを疊音部にとつたらしいということである。i の場合は名詞の方からは見えないが、mi-動詞の事情に鑑みるにやはり本来は疊音部になかったと見るべきであろう。すなわち、アクセントが疊音部にある場合は疊音部の母音は e であり、ない場合 (= 語根にある場合) は疊音部の母音は弱化して i になったと考えられるのである (Beekes1995: 171, 190, 235)。つまり疊音部の母音が i か e かは本来はアクセント位置によって決まったのであり、動詞の場合は形態機能による分化が行なわれたのであった。

実際、i と e による疊音式名詞は数こそ少ないものの印欧祖語の時代には十分に発達していたようで、各語派にも次のようなものが見られ、語派間で共通なものもいくつか見受けられる。

①加音 e を伴うもの

A. $C_1é-C_1oC_2$

Lat. memor, -oris 「思い出の、記憶している」 < IE**mé-mor*

Hitt. *mēmal* n. 「オートミール」 < IE**mé-mol*_{H2}

B. C₁e-C₁C₂-

α) -o-s, -eH₂, -o-m

Lith. *bēbras* (2)m. 「《動》ビーバー」 < IE**b^hé-b^hr-o-s*

Skt. *cakrám* n., OE *hweohhol*, *hweogol*, *hweowol*, *hwēol* m. > E. *wheel*,
Du. *wiel* [ui · l](-en)n.², Lith. *kāklas* (4)m. 「首」³, Gk. *χύκλος* m., pl.(n.)
χύκλα (E722, Σ375) (リトアニア語以外は全て「車輪」) < IE**k^we-k^wl-o-s*

m., coll. pl. **k^wé-k^wl-H₂*

β) -u-s

Lith. *bēbrus* (2)m. 「《動》ビーバー」、OPruss. *bebrus*,

Thrac. *Βέβρουκες* (部族名) (Duridanov1985:67,75), Skt. *babhrus* < IE**b^hé-
b^hr-u-s*

γ) -mo-s, -m-eH₂

Gk. (Dor.) *τεθμός* m. 「定まったこと、掟、法」 Welsh *deddf* (-au) f. 「法」
< IE**d^he-d^hH₁-mó-s, -m-éH₂*

δ) -yo-m

Skt. *sasyám* n. 「種」、Bret. [ブルトン語] *heiz*, Welsh *haidd* (*heiddiau*)
m. 「大麦」⁴ < IE**se-sH₁-(i)yó-m, pl. *-(i)y-éH₂* : Lat. *sēmen, minis* n. 「種

² 「車輪」で梵語と蘭語は中性で、古代英語と古代ギリシア語は男性と性がわかれ、しかも古代ギリシア語に複数では中性のものも存在するという混乱した性の分布を示すが、これは中性の複数が一種の集合数であり、単数の性とは関係なかったことを示している。ギリシア語にはこれ以外にも *δίφρος* m. 「二輪馬車、戦車」に対する中性複数形 *δίφρα* (Call. *Dian.* 135) や *μηρός* m. 「腿、腿の骨;骨付きの腿肉」に対する *μηρα* (A464) や *ρύπος* m. 「不潔物、汚穢、汚れ」に対する *ρύπα* (ζ93), *κέλευθος* f. 「道、道程」に対する *κέλευθα* (A312, M225) 「海路」等があり、いずれも集合的な意味であった。例えば *μηρός* に対する通常の複数形 *μηροί* は「一つ一つの太腿の部分」であったが、これに対して中性複数形の *μηρα* は「犠牲として神に捧げるまとまった太腿の肉」を意味した(高津春繁 1960: 55)。またこれは古代ギリシア語に限った現象ではなく、ラテン語にも *acinus* m. 「《植》漿果、苺・葡萄の類、葡萄の実」に対する中性複数 *acina* や *clivus* m. 「傾斜、勾配。丘陵、岡」に対する *cliva* (Mem. poet. 1.), *iocus* m. 「冗談、しゃれ」に対する *ioca* (Lucr. 5. 1397) 等がある。またここでの「車輪」のアクセント位置は *μηρός* m., n. pl. *μηρα* < IE**mēms-r-ó-s, *mēms-r-H₂* (cog. Lith. *mėsà* (4)f. 「肉」、Goth. *mimz* (1C8, 13), Lat. *membrum* n. 「(身体の一部、四肢、肉体)」の交替に基いている。なおイヴァン・ドブレフ 1993: 146-8 にも誠的な確な説明がある。

³ リトアニア語では通常 IE**e* は *e* として現われたが、後続音節の *a* によって逆行同化を受け *a* になることがしばしばあった。例えば Gk. *ἔσπερος* m. 「夕方、宵の明星」、Lat. *vesper, -erī* m. 「夕方、晩。《天》宵の明星。西方」 Russ. *вечер, 複вечерá* m. 「夕方、晩、宵」 < IE**wé-ksp-er-o-s* (cog. Av. *xšap-* f. 「夜」) に対する Lith. *vākaras* (3b) m. 「夕方、晩; [複] 西」を参照のこと。

⁴ ウェールズ語では本来の IE**e* は基本的には保存された (Lat. *mel, mellis* n. 「蜂蜜」に対する W. *mêl* 「蜂蜜」や Lat. *verū* n. 「鉄串、投げ槍」に対する W. *bêr* (*berau*) m. 「槍、焼き串」

子。苗、挿し木。種族」、Russ. сѣмя, семенá n. 「種」 Lith. sėmenys, 複属 sėmenų pl. m. (1, 3) 「亜麻仁」 < IE*séh₁-m̥n̥, Ir. síol(pl ~ ta)m. < OIr. síl n. 「種、(珈琲)豆」、Welsh hil f. 「種族、血統」 < IE*seh₁-lo-m n., Welsh had (-au) m. 「種」 < IE*s_h1-tú-s

②加音 i を伴うもの

C₁i-C₁C₂-ó-s

Lat. fiber, brī m. 「《動》海狸」 OHG bibar > G. Biber m. 「海狸、ビーバー」、

Gaul. [ガリア語] Bibracte (城砦名) (Lambert 1997: 38, 59, 188-9) < IE*b^hi-b^hr-ó-s

以上、数こそ少ないものの各語派に共通し、明らかに印欧祖語に遡り得る重要なものも見受けられるが、うえに見てのとおり、「車輪」、「種」、「ビーバー」、「法、掟」といった彼ら印欧祖語民族にとって身近であったろうものも多く、この点は語根名詞とも共通している。語根名詞も印欧語形態論の中ではもっとも始原的なものであり、疊音式名詞もどちらかという幼児語的な象徴的な単語であったらしいことを考えると、この点において軌を一にするのである。日本語の「葉っぱ (ha-ppa)」や「お目々 (o-me-me)」や「お手々 (o-te-te)」と同じようなものであると考えれば納得が行く。実際、「ビーバー」*b^hé-b^hr-u-s, -o-s, *b^hi-b^hr-ó-s などは英語の brown、蘭語の bruin [brœyn] やリトアニア語の béras 「(馬につき) 栗毛の、褐色の」等と同根で「茶色い奴」であったのである。

このように、部分疊音型の中でも加音 i と e を伴うもの、すなわち第 2 章で言うところの β. ①・②型は印欧語的に見ても非常にすんなりと解決できるが、むしろ問題なのはそれ以外のパターンである。このうち α. 型、すなわち完全疊音型はもっとも単純なパターンで、他語派にも対応例が見られ、類型的には語族を越えて(上述のように)日本語にも見られるので、何ら問題はない。ことに加音 i を伴わない α. ②型は全く問題がないと言ってよい。古代ギリシア語ならびにその対応形以外でも古代教会スラブ語の glagolŭ m. 「言葉」(ロシヤ語

を参照)が、後続子音との結合によって生じた二次的な ei は中世ウエールズ語から現代ウエールズ語にかけて漸次 ai へと変化していった。W. saith^N 「7」 < MW. seith^N < pCelt. *sextam (Gaul. sextamētos 「第 7 の」、Ir. seacht n- < OIr. secht n-) < IE*septi^{n̥} (= Lat. septem, Gk. ἑπτὰ, Skt. saptá, Arm. ewt'n, Du. zeven) や W. nai (neiaint) m. 「甥」 < MW. nei < pBrit. *neis < pCelt. *ne(h)ūs < IE*népōs (= Lat. nepōs m. 「孫。甥」、Du. neef m. 「甥」、Skt. nāpāt m. 「孫」) を参照のこと。序数詞の W. seithfed [seiθved] 「第 7 の」(ガリア語形参照)には本来の e 音が保存されている。

にглагол m. 「動詞」なる借用語で入っている) 等がある。従って、最も問題となるのはβ. ③型、すなわち部分疊音型のうちで加音 i と e を伴わないものであって、これについて自らの見解を述べて見たい。

まずβ. ③型には第 II 章で見たとおり 5 つの単語が属する。このうち最初の 2 語βάβαξ m. 「饒舌な人」とΠαφλαγών m. 「パフラゴニア人」は語根部の母音を単純に疊音するだけのもので、次の 3 語λαῖλαψ f. 「暴風、突風」ἀ-μαιμάχετος (poet.) 「抵抗し難い、打ち勝ち難い」παιπαλόεις (ep.) 「峨々たる、高く聳えた」は語根部の母音 +i を疊音している。まず単純疊音型から見ていきたい。

単純疊音型の 2 語は厳密に言うならば、いずれも語源不詳である。このうち Παφλαγών は Chantraine 1968: 866 によると φλέω 「溢れるほど沢山ある」、φλύω 「(言葉が) 溢れ出る」と同根かも知れない (後者の 2 語は明らかに同根で、同一語根の e 階梯と φ 階梯である) と言うが、あくまでも憶測にしか過ぎない。残る βάβαξ に関しては Chantraine 1968: 154 は完全にお手上げのようであるが、むしろこちらの方が印欧語根に遡る可能性がある。但しギリシア語としてではなく借用語として。古代ギリシア語には印欧祖語から引き継いだ本来の単語以外にも (文化語を中心に) 数多くの借用語があった。このうち近隣のトラキア語やイリュリア語や実際に文献の出土している印欧アナトリア語派諸言語 (特に同時代のリュキア語やリュディア語) やセム・ハム諸語では明らかにないものの印欧語的な香りのする一群の単語があった。これをヘーロドトス『歴史』の巻 1 第 57 章、巻 5 第 26 章、巻 8 第 44 章などに伝えられている先住民族 Πελασγοί にちなんでペラスギア語 (Pelasgian) と呼んでいる。例えば ἄμβων m. 「杯の縁」 < *omb^hōn < IE*_{H3}émb^h-ōn (= Lat. umbō m. 「(盾の中央の) 突起部。臍、臍窩」)、ὄμφαξ f. 「未熟な葡萄」 < IE*_{n̥}-pok^w-s (Welsh pobl 「(パンを) 焼く、焙る」)、σῖτος m. 「穀物」 < IE*_kwéid-os (≡ E. white 「白い」、wheat 「小麦」 < OE hwæte < pGmc. *χwaitja- = Du. weit f. 「小麦」) ταχύς 「速い」 < IE*_tok^w-ús (= Lith. takùs 「流れる、流動性を持つ」) e 階梯形 tekù [現在単 1] 「流れる、走る」) 等がそうで、この 4 語からわかることはペラスギア語はゲルマン語と似たような音韻変化を起こしたということである。すなわち IE*_o > Pelasg. a, IE*_{n̥}, *_{m̥} > Pelasg. on, om であり、有声帯気音は有声無気音に (M(ediae)A(spiratae) > M)、有声無気音は無声無気音に (M > T(enues))、無声無気音は無声帯気音に (T > TA) 推移するというゲルマン語の第一次子音、所謂「グリムの法則」と同様の音韻推移を起こしたのであった。(Katičić 1976: 71-5)。本題に戻るが、このように考えていくと βάβαξ

はβάσκανος(Erinna6.3)「中傷的な、陰險な、悪意ある；嫉む、羨ましそうな」、
βάσκειν・λέγειν, κακολογεῖν, καὶ ἀνίστασθαι (Hsch.)「言う、罵る、誹謗する」
等とともに < IE*b^hh₂-ské/ó- (> Gk. φάσκω「言う、言明する、断言する」)
に遡り、究極的には Gk. φημί「私は言う」 < IE*b^héh₂-m-i にも繋がるペラス
ギア語からの借用語であるとみて差しつかえない。つまり単純疊音型の 2 語は
いずれも本来のギリシア語ではなく、そしてその疊音も他の疊音に似せてつく
られたのであろう。

では次に語根部の母音+i を疊音部に持つ 3 語について見ていきたい。これも
厄介である。λαῖλαψ は全く語源がわからないし、続く παιπαλόεις も憶測の域を
出ない (Chantraine 1968: 613, 848)。従って ἀμαιμάκετος で見るしかない。

まず最も安易な解決法としてはこれをギリシア語独自の改新とみ、β. ②型に
なぞらえて造ったものと見る見方だが、私はこれを印欧語伝来のものとして見た
い。つまり、インド・イラン語派に組織的に保存された強意活用 (Intensives) を
模したものと見るのである。この活用は古代ギリシア語にもごくごく部分的
に残っており、例えばποιπνύω「忙しく動き回る、忙しく働く」 < IE*pou-pnu
(h₂)-yó-h₂ (cog. Du. niesen < MDu. fniesen「くしやみをする」、OE fnēosan
< pGmc. *fneusanaⁿ) 等がそうであるが、印欧語的には次のように図式化でき
た。

(i) 非幹母音型 (athematic type)

能動単数 IE C₁éC₂-C₁eC₂-D Av. daidaišt

双・複数・中動 IE C₁éC₂-C₁C₂-D Ved. dédište [中動現在]

例 Av. vaividati [複 3]「見つける」 < IE*wéi-wid-nt-i

vaividai [中動単 1] < IE*wéi-wid-h₂e-i: Skt. vévid-

Av. zauzaumi [単 1]「呼ぶ」 < IE*ĝ^héu-ĝ^heu(h₂)-m-i cog. Ir. guth, 属
gutha m.「声」 < OIr. guth, 属 gotho (< IE*ĝ^hu-tú-s, *ĝ^hu-tóu-s)

Skt. jōhavīti [単 3]「呼ぶ」 < IE*ĝ^héu-ĝ^heuh₂-t-i cog. Russ. звать, 現
単 1 зовы「呼ぶ」(*ĝ^hwéh₂-tei, *ĝ^huh₂-ó-h₂)

Skt. janghānti [単 3]「殺す」 < IE*g^{wh}én-g^{wh}en-t-i

(ii) *-yé/ó-型現在

C₁eC₂-C₁C₂-yé/ó-D

Skt. marmrjyāte [中動単 3]「綺麗にする、純化する」 < IE*mer-mrĝ-yé-to-i

なおこれには疊音部に加音 i を伴った変異形があり、Macdonnel Vedic Grammar
391 頁によるとヴェーダ語の強意活用のうち 20 あまりがこの形をとるといふ。

例えば gan-ī-gmat 「行く」 < IE*^gwém-i-g^wm-e-t, ghan-ī-ghan- 「殺す」 < IE*^gwhén-i-g^{wh}en-, san-ī-šan- 「得る」 < IE*sénH₂-senH₂- 等がそうであり、最後のものはヒッタイト語の同源語 saḥzi (KBo XXII 1 17')(OHitt)、複 3 sanḥanzi 「探し求める」 < IE*sénH₂-t-i, *snH₂- ént-i (Oettinger 1979: 512) に鑑みるに、ここでの-īは間違いなく母音化したラリンガルだが、前 2 者はそうはいかない。最後のものからの類推と見ることもできなくもないが、現に i を挿しはさまない形もかなり生産的な形としてあるのだから、やはりこれは違うものだと見るべきだろう。従って私はこれを現在幹に特有の畳音部の添加母音とみたい。そうすると上述の図式化以外にも i を挿し 缺んだ C₁éC₂-i-C₁eC₂-D [能動単数] ~ C₁éC₂-i-C₁C₂-D [能動双・複数・中動] なる図式も存在したこととなり、これが畳音式名詞にも応用されたのである。

つまり、結論から先に言うところここで問題となっている ἀ-μαϊράχτος は IE*sm₁-mén₂-i- mH₂k₁-eto-s に遡ることとなり、動詞の強意活用と同一パターンの畳音を伴っているのである。なお語根部のアプラウト階梯についてであるが、印欧語的には e 階梯と並んで φ 階梯も許容された。確かに ἀρι-δείχτος (A248) 「～に名の轟いた」、ἐρπετόν n. 「《動》這つて歩くもの、爬虫類」、μενετός 「辛抱強い、待つ」や Skt. darśatás 「見える、可視の」 < IE*derk₁-etó-s, yajatás 「崇められるべき」 < IE*yeg₁-etó-s 等は e 階梯であるが、しかしこれと並んで ἀ-σπετος 「言うに言われぬ、名状し難い；驚くべき；無限の、尽きぬ」 < IE*₁sk^w-eto-s (cog. Lat. in-seque (Enn. acc. Paul. Fest. p. 111M) [命令単 2] 「語れ」、Lith. sèkti, 単現 lsekù 「語る」、pā-saka (1)f. 「物語、民話」 < IE*sok^w-én₂), ἀ-σχετος 「制し難い、止まらない；抗し難い、打ち克ち難い」 < IE*₁sg^h-etó-s (= Av. a-zgata-), ὄρπετον (Sapph. 40, Theoc. 29. 13.)(Lesb.)n. 「《動》這つて歩くもの、爬虫類」 < IE*s₁rp₁-etó-m⁵ といった φ 階梯も存在したのであり、しかもこの中には明らかに印欧祖語に遡りうる語があるという事実に鑑みるに、

⁵いかにレスボス方言といった単語。これは 3 つの点から指摘できる。まずは語頭の気音 h- が脱落する psilosis。これは東イオニア方言、クレタ方言、エリス方言、キュプロス方言にも見られた (高津春繁 1960: 39-40)。次に特徴的な IE*₁r > op, po なる現われ。これは psilosis とは異なり、系統的にも近縁なアルカディア・キュプロス方言とアイオリス方言群 (レスボス方言、テッサリア方言、ポイオーティア方言) にしか見られない (Buck 1955: 144, 147, CHARTI)。ホメロスに現われる ἦτορ (Φ389etc.) n. (poet.) 「心 (臓)、気概、心情、精神」 < IE*ét₁-r (= OHG ādara > G. Ader f. 「血管」、幹音型アオリスト単 2 ἦμβροτες (X279) (現在 ἀμαρτάνω) 「的を外した」 < IE*é₁-n₂mrt₁-e-s 等はこれらの方言の特徴だと思われる。そして最後に決定的なのが徹底した後退的アクセント (recessive accentuation)。これこそがまさにこの方言を特徴づけるものであり (高津春繁 1960: 46-7)、これら 3 つの特徴より、この語はまさにレスボス方言の単語だと決定づけることができるのである。

祖語では*-etó-s に対しては e 階梯も ϕ 階梯も許容されたのであった。従って母音交替の階梯に関しては何ら問題はない。むしろ疊音の仕方がかなり broken なのが気にかかるが、これとても強意活用において完全な疊音が行われたのは C_1eC_2 -なる二子音語根に限ってのことであって、 C_1eRC_2 -や $sC_1(C_2)eRC_3$ -といった三子音以上語根に関しては末尾子音を脱落させたので (図式化での上掲例を参照にいただきたい)、問題には値しない。つまり α -μαιμάχεται は完全に印欧語的な大原則にのっとってできた語であり、共時的にはわかりにくいのが、上の説明からも察せられるように、第 2 章の α ①型と同一パターンのものであったのである。なお IE*-etó-s に関しては Sihler 1995: 628-9 にもまことに確かな説明がある。

以上を総合するに、疊音式名詞は動詞の疊音式活用を模したものであるということと、疊音の仕方には完全疊音型と部分疊音型があり、前者は加音 i の有無によって、後者は加音の種類 (i か e か) によってそれぞれ 2 通りに分かれ、都合 4 通りがあったということと、それ以外の疊音部の母音が α のものはギリシア語内での創作であるということが確認された。次章ではこれまでの纏めを行ないたい。

4 総まとめ

前章の最後に述べたように、これまでの考察によっていろいろな事が確認されたが、これをもう少し仔細に纏めると以下ようになる。

まず、古代ギリシア語には 30 語近く (現在確認したところでは 27 語) の疊音式名詞が保存されたということ。しかるに他の諸語派、ラテン語、ケルト語派、バルト語派、ゲルマン語派、ヒッタイト語等ではごくごく僅かに散見される程度であり、この数でも印欧諸語派の中では圧倒的に多かったということ。これは印欧語においては擬音語や擬態語に代表される、疊音を伴った感覚的な単語が少ないという事実に起因しているものと思われる。実際、明らかに印欧祖語に遡ると考えられる疊音式名詞について見てみると、「車輪」、「ビーバー」「種」「法」「掟」といった彼ら印欧祖語民族にとって比較的身近であったろうと思われる単語が多く殊に「ビーバー」なぞは「茶色い奴」であった。「車輪」*k^wek^wl-ó-s m., n. pl. *k^wék^wl- μ_2 の語根*k^wel-も本来は擬音語であった可能性があり、(日本語の「コロコロ (koro-koro)」を参照)、「コロコロ転がすもの」と見ることも

できなくもない。

次に疊音の仕方について。第 2 章では比較的共時的な立場から纏めてみたが、ここでは印欧語比較形態論的な立場から纏めてみたい。

まず、印欧祖語において疊音は本来は動詞のものであり、これを模することによって疊音式名詞ができたということ。但し、疊音は動詞においては形態機能的な区分を持っていたが、名詞においてはそれは観察されないということ。しかるに名詞においても動詞同様完全疊音型と部分疊音型があり、前者は加音 *i* の有無によって、後者は加音の種類 (*i* か *e* か) によってそれぞれ 2 通りに分かち、都合 4 通りあったということ。しかし名詞においては完全疊音型が若干優勢であったのに対して、動詞においては部分疊音型が基本であったということ。さらに古代ギリシア語においてはギリシア語独自の創作が 1 パターンあり、印欧祖語伝来のものとあわせて 5 パターンあったということ。具体例については第 2 章で見ていただきたいが、これら 5 パターンを動詞との関連において図式化すると以下のようなになる。

A. 完全疊音型 (15 語)

①加音 *i* を伴うもの (5 語)

$C_1éC_2-i-C_1C_2-$ (=強意活用双・複数・中動)

i) -o-s m., - η_2 f. (2 語)

μέδιδμος m. < IE**méd-i-md-o-s*

μέριμνα f. < IE**mér-i-mr- η_2*

ii) -eto-s (1 語)

ἄ-μαιμάκετος < IE**sm̥-méh η_2 -i-m η_2 k-eto-s*

iii) 語源不詳 (2 語)

λαῖλαψ f., παιπαλό(F)εις

②単純疊音型 (10 語)

α. 1) $C_1éC_2-C_1eC_2-$ (=強意活用単数) (2 語)

-o-s m., - η_2 f.

μέρμερος (ep.) < IE**mér-mer-o-s*

μέρμηρα f.(poet.) < IE**mér-mēr- η_2* (長母音は metrical lengthening か?)

2) $C_1éC_2-C_1C_2-$ (=強意活用双・複数・中動) (1 語)

δένδρε(F)ον (N437)(Ion.), δένδριον (Alc.44)(Aeol.)n. < IE**dér-dr-ew-o-m*
← IE**dór-u*, 属**dr-éu-s n.* > Ved. *dáru*, 属 *drós*, Av. *dāuru*, 属 *dravš*, OPers. *dāruv*, OHitt. *ta-a-ru/dáru*/(KBo XVII 3IV12)(Weitenberg 1984: 48-49, 367-

8), Gk. δόρυ, Thrac. Taru-thinas (Duridanov 1985: 64, 85), OIr. daur, 属 daꝛo, -a f. 「櫛の樹」(Cill Dara 「櫛の樹の教会」 > Kildare): Welsh derwen, 複 derw f. 「櫛の樹」(e 階梯形)

β. その他 (語源不詳含む) (7 語)

βάρβαρος < IE*bár-bar-o-s = Lat. barbarus, Skt. barbaras

καρκίνος (carm. conv. 16) m., pl. n. καρκίνα (AP 6. 295. 5(Phan.)) < IE*kár-kr-o-s, n.pl. *-ḡ₂=Lat.cancer, -crī, m./n. : Skt. karkatās (< IE*kar-kar-to-s)

ὄλολυγή f. < IE*ul-ul- : Lat. ulula f. 「梟」

βόρβορος m.

χάρκαρα (Semon. 33) n. pl.

μάρμαρος m./f. 「大理石」

πορπυρίς (Ibyc. 4, Ar. Av. 304) f.

B. 部分疊音型 (12 語)

①加音 i を伴うもの (5 語)

1) C₁i-C₁eC₂- (= mi-動詞単数) (2 語)

i) -o-s m. (1 語)

ᾠμερος m. < IE*si-smer-o-s cog. Skt. smarati

ii)-n-eḡ₂ f. (1 語)

τιθήνη f. < IE*d^{hi}-d^héḡ₁-n-eḡ₂: Lyc. tideimi, 複対 tideimis (i-幹) c. 「子供」(大城光正・吉田和彦 1990: 215-6, 231) < pAnat. *didéyommi-s, *-ns < IE*d^{hi}-d^hḡ₁-éy-o-mn-i-s, *-ns (アクセント位置その他については Melchert 1994: 316, 318) = Luw. titaimi- 「授乳された」; Luw. tītani (KUB XXXV 103 III 6) c. 「乳房」(大城光正・吉田和彦 1990:153) cog. Lith. dėlė (4) f. 「蛭」≡ θηλή f. 「乳頭」 < IE*d^heḡ₁-l-éḡ₂

2) C₁i-C₁C₂- (= mi-動詞双・複数・中動) (3 語)

i) -ó-s m., -éḡ₂ f. (2 語)

ίστός m. < IE*s-i-stḡ₂-ó-s: Gk. ἴστημι, 複 1 ἵσταμεν, 中単 1 ἵσταμαι 「立てる、[中] 立つ」、Lat. sistō 「立てる、置く」、Skt. tiṣṭhati

(F)i(F)αχή f. < IE*wi-wḡ₂g^h-éḡ₂

派 αἰῆχος, 複 -οι(N41)(Aeol.) 「大声で叫ぶ、一緒に叫ぶ」 < *áv-FiFαχος < IE*wi-wḡ₂g^h-o-s (ホメロスにおける F/w の名残り)

ii) -mo-s (1 語)

διδυμος < IE*di-du-mo-s

②加音 e を伴うもの (5 語)

1) C₁e-C₁oC₂- (= 完了単数) (3 語)

-éh₂ f.

ἀλωκή (N251)f. < IE*H₂kē-H₂ok̄-éh₂

ἐδώδη (ξ193) f. < IE*H₁de-H₁od-éh₂: 完了分詞ἐδηδώς (P542) (現在ἐσθίω)
「食べてしまった」 < IE*H₁de-H₁d-wós (但し φ 階梯)

ὀδώδη f. < IE*H₃de-H₃od-éh₂: 完了ὀδώδα [意味は現在]、過去完了単 3
ὀδώδει/-ē/ (ε60) [意味は未完了過去] (現在ὀζω「匂いがする(芳香にも悪臭にも)」)
< IE*H₃de-H₃ód-H₂e, *-e

2) C₁e-C₁C₂- (= 完了双・複数・中動) (2 語)

*-mo-s m.

ἐτήτυμος (X438)(poet.) < IE*H₁te-H₁tu-mo-s cog. ἐτε(F)ός「真の、本当の、真実の」(e 階梯形)

τεθμός (Dor.) m. < IE*d^he-d^hH₁-mó-s ⇨ Welsh deddf (-au) f. 「法」 < IE*-m-eH₂: 完了不定法τεθῆναι (Hdt.2.42.) 中動単 1 τεθειμαι < IE*d^he-d^héH₁-n-eH₂-i, *d^he-d^hH₁-(m)-H₂é-i, Du. deed (doen「する」過去)

③ギリシア語独自の創作 (2 語)

βάβαξ (Archil.33) m. (Pelag.)(?): βάζω (poet.)「喋る、言う」 βάξις (Mimn.15)、
属 (Ion.) βάξιος (Mimn.16) f. 「言うこと、言葉；神託」

Παφλαγών m.: παφάζω「湧き立つ、泡立つ、荒れ狂う」

以上が印欧語比較形態論に基いた図式化とその解析結果であるが、動詞の疊音式活用の諸形式との関連はおわかりいただけたかと思う。あと古代ギリシア語内部からは確認できない事実ではあるが、上例の B. ①) 型では印欧祖語においては疊音部の i にアクセントがなく、語根(幹)部にあったらしいことはアナトリア語派のリュキア語より確認できる。母音*e の上にアクセントがあったおかげでこの*e は無傷のまま残り、その直後の*o が脱落したのである (Melchert 1994: 318)。リュキア語での*e > pAnat.*e の現われは基本的には e であった (Melchert 1994: 311)。また随時説明してきたがごとく B. ①) 型が mi-動詞の疊音を模したものだとするれば、mi-動詞の能動単数では語根母音の e の上にアクセントが落ちたので、疊音式名詞とのアクセントパターン上的一致がアナトリア語派のデータより裏付けられることとなる。第 3 章での各語派での疊音式名詞の実例の前々段落で述べた「i の場合は名詞の方からは見えないが、」は訂正さ

れなければならない。また同箇所付近で述べたとおり、加音の i と e の分布については本来はアクセントの有無によるものであり (i が無アクセントで e が有アクセント)、語根名詞や単純 o-幹、単純 u-幹では比較的あてはまるが、非語根名詞の場合、アクセント位置は接尾辞の種類によって決定されたので、本来のアクセント位置を残していないことは申し添えておかねばなるまい (B. ② 1) 型が典型である)。

ともかく疊音式名詞は動詞の疊音式活用の諸形式と密接に関係しており、印欧祖語の時代にもそれなりに造られたが、極めて感覚的な単語で、印欧語の中にあっては珍しい形式であったのである。

5 終わりに

本稿は、古代ギリシア語を中心とした印欧諸語の疊音式名詞というやや珍しい範疇について、自ら集めたデータと吸収した理論によって解析し、独自に纏めたものである。結論は前章で述べたとおりであるが、名詞と動詞という異なった形態を用いる範疇にあって、アプラウトパターンとアクセントパターンにおいては恐ろしい迄の一種の相通が見られ、人間の持つ感性の興味深い一面が感じられた。そういう点においても疊音式名詞は考えさせられる範疇であった。なお古代ギリシア語とラテン語の出典箇所はいずれも Oxford の *Greek English Lexicon* と *Oxford Latin Dictionary* での略号を採用した。但しホメーロスだけは *Ilias* はギリシア文字の大文字で、*Odysseia* は同じく小文字で巻数を表わした。

参考文献

- Beekes, Robert S. P. (1985) *The Origins of the Indo-European Nominal Inflection*. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 46) Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck
- Beekes, Robert S. P. (1995) *Comparative Indo-European Linguistics*. John Benjamins Publishing company (Amsterdam/Philadelphia)
- Buck, Carl Darling (1955) *The Greek Dialects*. The University of Chicago Press (Chicago & London)

- Chantraine, Pierre (1968) *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*. Editions Klincksieck (Paris)
- Duridanov, Ivan (1985) *Die Sprache der Thraker*. Hieronymus Verlag (Neuried)
- イヴァン・ドブレフ著 石田修一訳 (1993) 『古代ブルガリア語文法』 (=大阪外国語大学学術研究双書 8) 大阪外国語大学学術出版委員会 (大阪府箕面市) [原題 *Старобългарска Грамматика* с/о JUSAUTOR (София, 1982)]
- Katičić, Radoslav (1976) *Ancient Languages of the Balkans*. (=Trends in Linguistics State-of-the-Art Reports 4) Mouton (The Hague, Paris)
- 高津春繁 (1960[昭和 35]) 『ギリシア語文法』 岩波書店 (東京)
- Lambert, Pierre-Yves (1997) *La langue gauloise*. editions errance (Paris)
- Macdonell, Arthur Anthony (1910) *Vedic Grammar*. 名著普及会 (東京都港区) による昭和 52 年 (1977 年) の復刻版
- Melchert, H. Craig (1994) *Anatolian Historical Phonology*. Editions Rodopi B.V. (Amsterdam-Atlanta, GA)
- Oettinger, Norbert (1979) *Die Stammbildung des hethitischen Verbums*. (= Erlanger Beiträge zur Sprach- und Kunstwissenschaft 64) Verlag Hans Carl (Nürnberg)
- 大城光正・吉田和彦 (1990[平成 2]) 『印欧アナトリア諸語概説』 大学書林 (東京)
- Risch, Ernst (1974) *Wortbildung der homerischen Sprache*. Walter de Gruyter (Berlin-New York)
- Sihler, Andrew L. (1995) *New Comparative Grammar of Greek and Latin*. Oxford University Press
- Weitenberg, J.J.S. (1984) *Die Hethitischen U-Stämme*. Rodopi (Amsterdam)

辞書・語彙集類

※参照文献にあるものは省略した。

インド・イラン語派

Beekes, Robert S. P. (1988) *A Grammar of Gatha-Avestan*. E. J. Brill (Leiden)

Reichelt, Hans (1978) *Avestisches Elementarbuch*. Carl Winter Universitätsverlag
(Heidelberg)

バルト・スラブ語派

Lyberis, Antanas (1988) *Lietuvių-rusų kalbų žodynas*. Mokslas (Vilnius)

村田郁夫 (1994[平成 6]) 『リトアニア語基礎 1500 語』大学書林 (東京)

東郷正延・染谷茂・磯谷孝・石山正三編 (1988[昭和 63]) 『研究社露和辞典』研
究社 (東京)

ギリシア語派

Capelle, Carl (1968) *Vollständiges Wörterbuch über die Gedichte des Homeros
und der Homeriden*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft (Darmstadt)

Frisk, Hjalmar (1973) *Griechisches etymologisches Wörterbuch*. Carl Winter-
Universitätsverlag (Heidelberg)

古川晴風 (1989[平成元]) 『ギリシア語辞典』大学書林 (東京)

Liddell, Henry George & Scott, Robert (1940) *Greek-English Lexicon*. New
(ninth) edition (revised by Stuart Jones & McKenzie) Oxford at the
Clarendon Press

イタリック語派 (ラテン語)

Glare, P. G. W. (1973) *Oxford Latin Dictionary*. Oxford at the Clarendon
Press

田中秀央編 (1966[昭和 41]) 『羅和辞典』増訂新版 (初版 1952[昭和 27]) 研究社
(東京)

ケルト語派

Lewis, Henry · Pedersen, Holger (1961) *A Concise Comparative Celtic Gram-
mar*. Vandenhoeck & Reprecht (Göttingen)

MacMathúna, Séamus & OCorráin, Ailbhe (1995) *Collins Gem Irish Dictio-
nary*. Harper Collins Publishers (Glasgow)

Thorne, David A. (1991) *Collins Spurrell Welsh Dictionary*. Harper Collins
Publishers (Glasgow)

ゲルマン語派

千種眞一編著 (1997[平成 9]) 『ゴート語辞典』 大学書林 (東京)

van Sterkenburg, P.G.J., Boot, W.J., 財団法人日蘭学会監修 (1994[平成 6]) 『講談社オランダ語辞典』 講談社 (東京)

中島文雄・寺澤芳雄共編 (1970[昭和 45]) 『英語語源小辞典』 研究社 (東京)

寺澤芳雄編集主幹 (1997[平成 9]) 『英語語源辞典』 研究社 (東京)

アナトリア語派

Laroche, Emanuel (1959) *Dictionnaire de la langue louvite*. Librairie Adrien-Maisonneuve (Paris)

Examples of the Reduplicated Nouns in Ancient Greek and its Analysis in the Light of Indo-European Morphological Theory

Ikuma YOSHIDA

The aim of this paper is to give sufficient examples of Ancient Greek Reduplicated Nouns and analyse them in the light of Indo-European comparative morphological theory.

In Proto-Indo-European there was a group of nouns called Reduplicated Nouns which were made by the reduplication of the root. The ways of the reduplications of the roots in Indo-European Reduplicated Nouns precisely correspond to those of the reduplicated conjugations in Indo-European verbs, i.e. Reduplicated Root Presents (=mi-verbs), Perfects, Intensives. In this paper I showed this fact after having debated mainly on the Greek examples collected by myself in the light of Indo-European comparative morphological theory which I have absorbed thus far.